第51回身心変容技法研究会　「ユーラシアをつなぐ身心変容動線の過去と未来～中国とロシアを貫通するもの」鎌田東二  
１、中国との関わり（1990年より約10回ほど訪問。主に気功シンポジウム参加）とロシアとの関わり（1990年8月旧ソ連の宇宙関連施設【宇宙飛行士の街・バイコヌールのロケット打ち上げ基地】視察、ウラジオストックの大学での講義と今回のウラジーミル訪問など3回）  
２、中国とロシアにおける政治と宗教（身心変容とその技法を世に訴えた法輪功とオウム真理教が両国で引き起こした波紋）  
３、ロシア/ヨーロッパと日本をつなぐ動線としてのモンゴル族とモンゴル軍～13世紀モンゴルの東西串刺しの騎馬戦  
４、匈奴・モンゴル・朝鮮から日本にもたらされた「鳴鏑」＝比叡山の神が持つ音の出る矢  
５、ロシアにおける東京ノーヴィ・レパートリーシアターによる『白痴』（ドストエフスキー）と『古事記』公演

６、スタニスラフスキー・システムと世阿弥の『風姿花伝』

７、ユーラシアを結ぶ未来動線  
８、まとめ

＊スラニスラフスキーシステムを独自に解釈し練り上げたスタニスラフスキー～アニシモフ方式  
①心の栄養になる演劇  
②私が私に遭いに行く演劇  
＊「私が私に遭いに行く」とは、演劇を通して自分自身の気づきや認識を深め、人間的成長を果たすということであるが、ここにはスラニスラフスキーシステムに基づく独自の人間学がある。  
スラニスラフスキーは、役者に、  
①超課題  
②貫通行動  
③分析  
の3つを徹底的に意識させることを常に突きつけていたという。「超課題」とは、自分が人生で一番求めているもの。「貫通行動」とは、その「超課題」にどう向っているか串刺しする行動。「分析」とは、その「貫通行動」の中でその「役」が置かれている状況を分析し認識すること。  
　鎌田東二の「超課題」は「楽しい世直し」、「貫通行動」は科研：身心変容技法研究会やNPO法人東京自由大学や京都伝統文化の森推進協議会などの活動を貫き串刺しする「創造性の渙発」、「分析」はその一つ一つの具体的な位置やはたらきや効果・影響など。  
　スタニスラフスキーは、俳優育成のために明確なカリキュラムとメソッドを作ったが、その後のロシアの演劇大学は、①俳優術、②戯曲分析、③話法（発声法・滑舌・ヴォイストレーニング）、④ステージ・ムーブメント、⑤ダンス、⑥声楽、⑦哲学・心理学、⑧演劇史、⑨メイク術、⑩殺陣（フェンシング）、⑪アクロバットなどにカリキュラム化して指導している。

スタニスラフスキーはまた、ブラヴァツキーの神智学やルドルフ・シュタイナーの人智学に大変興味を持ってかなり読んでいた。リアリズム演劇の裏に神秘主義思想と神秘主義芸術感が蠢いている。セルゲイ・チェルカッスキーの『スタニスラフスキーとヨーガ』（堀江新二訳、未来社、2015年）には、1910年代にスタニスラフスキーがヨーガと出会い、「プラーナ」というヨーガ用語を使って俳優指導をしていたと指摘されている。  
　アニシモフは、「情緒」ではなく、「感情」をはたらかせよと迫る。「感情」は「心の栄養」になるが、しかし、「情緒＝エモーション」は有害にはたらく。現代社会のような文明生活では、深い「心の栄養」としての「感情」をはたらかせることは稀れで、慌ただしい日常生活の中で「情緒」の波に溺れている。その「情緒」が深い「感情」を封印し、破壊している。それが今日の「こころの問題」である。

したがって、現代社会における真の「こころのケア」とは、「情緒」を離れて「感情」をはたらかせる身心変容技法が必要になるということだ。アニシモフの提唱する「スタニスラフスキーへの道」とは、そのような「心の栄養」としての「感情」の深みとそのはたらきに到達することである。そして、芸術家の使命とはその「感情」を呼び覚ますことにあるという。そうした「感情」に訴えかける芸術をクリエイトしていく人間が必要としているとアニシモフは主張する。

9月21日の夜18時からアニシモフ演出による『白痴』が上演された。休憩を挟み3時間余。もっとも弱いがもっとも美しい「ドン・キホーテ」のような「キリスト」のようなムイシュキン像の存在を浮かび上がらせる。儚く、弱々しく、無垢で、純真な魂。ムイシュキン公爵。ドストエフスキーはその「美しい」無力極まりない人間を描いた。そのムイシュキンを複式夢幻能のように、アニシモフは演出した。

能のようなドストエフスキーの「白痴」。ミステリー（推理劇）とミステリアス（神秘劇）が溶け合ったような演劇。繊細微妙な心理劇。ベンチで寝ているムイシュキン後者の背後からアグラーヤとナスターシャが現われて最後の言葉を発するところなどは鬼気迫る複式夢幻能の世界を髣髴させた。

荒魂ロゴージンと和魂ムイシュキン。2人スサノヲのようなロゴージンとムイシュキンは、無垢と残虐の権化。まさに、スサノヲぶりである。そこに、荒魂ナスターシャと和魂アグラーヤが絡むのだが、これまた複雑骨折するような錯綜の末に誰もが「幸福」にはなれない。悲劇と悲惨の極みに落ち込んでいく関係性。純粋ゆえの破壊の末路というのもありふれた結末だが、このロゴージンとムイシュキンが『カラマーゾフの兄弟』のドミートリー（ミーチャ）とアレクセイ（アリョーシャ）につながり、その間をさらに「複雑骨折」させていくイワン（ワーニャ）とスメルジャコフの魔。ドストエフスキーは人間の「情緒」と「感情」の軋轢と深みを徹底して暴いてみせる。

上世博及氏による9月23日（金）「古事記」上演報告

（500席の）会場はほぼ満席でした。公演では字幕は使用せず、配布したロシア語パンフレットにあらすじを記載し、公演中、場面の切り替わりのところで通訳の遠坂先生が場内アナウンスのマイクで詩を朗読するようにそのシーンの意味を観客に伝える形で上演しました。

私のロシア留学時代のロシア人同級生の感想を元に公演中の様子を描きますと、１幕は、ロシア人には全く馴染みのないゆっくりとしたメロディー、歌、音、そしてほとんど動かない俳優たちに相当戸惑ったようです。ですが、客席全体が一体となって、その初めて体験する世界を何とか理解し、感じ取ろうと集中して観ていました。

結局何もわからないまま一幕が終了し、休憩に入りましたが、この休憩が１幕で観たもの、体験したものをそれぞれが咀嚼し理解する時間になったようで、２幕を見るにあたり意識の調律ができたそうです。

そして２幕、イザナギが黄泉の国へイザナミに会いに行くシーンから始まりますが、もうそこでは一気に舞台で繰り広げられる日本神話の世界に入り込み、舞台、客席が一つのエネルギー体となって一緒に神聖な儀式に参加し、言葉は分からないのにすべて心で理解し感じ取れる、不思議ながらも非常に心地よい神秘体験をしたそうです。終演後はブラボーの掛け声もあり、スタンディングオベーションで拍手喝采を受けました。

 翌日に創造的交流会があり、東京ノーヴイから俳優が１０人、ロシア側から俳優や演出家のほかに、ジャーナリスト、心理学者、教育者など２０名ほどで感想のシェア、我々の創造活動についての意見交換などが3時間ほどありました。

 ロシア人たちの共通した意見としては、言葉では伝えられない人類共通の叡智を体験し、非常に高度な精神世界に導かれ、自然、宇宙、神をこれほど感じることができる舞台作品は過去にはなかったであろう。俳優がその世界を創り出すのに全身全霊を捧げ、芸術に奉仕している演劇集団もいまやどこにもない。言葉の壁を完全に超越した人類共通の世界を描いている。

40年前にアニシモフが初めて旗揚げしたロシアの劇団で共に演劇活動をしていた女優は、当時目指していた人の心、魂、精神にまで「魔法をかける演劇」が、40年かけてついに日本の俳優たちによって実現した言っておりました。どのようにして、あのような世界を作り上げたのか、そこに至るまで東京でアニシモフ氏と共にどのような活動をしていたのかなどの質疑に劇団の俳優たちが応答しましたが、とにかく3時間の交流会がロシア側からの賛辞の嵐で、我々も本当に嬉しい限りでした。また、是非モスクワで再演をして欲しい、ロシア中で公演をして欲しいとの声もいただきました。



徳島新聞2016年9月1日付け朝刊文化欄記事

